

## いま、表現力をどう育てるか

——「紹介文」の学習指導の実践報告と研究協議をとおして——

木本 一成

### はじめに

筆者は、中学校における作文教育が抱えている様々な問題を、「他者の視点」「ものの見方・考え方」という面から解決していこうと考えた。題材として「日本文化を外国人の人に紹介する文章」を設定すれば、必然的に「他者」を意識したり、外国と「比較」したり、その子らしい「個別の見方」をしたりするであろうと思われる。生徒が書いた作文は一応それらしいものになったが、協議会での意見を拝聴するうちに、筆者の問題のとらえ方に決定的な誤りがあることに気づきはじめた。「他者の視点」も「ものの見方・考え方」も、「もの」として取り扱っている段階ではことは生きた力を発揮しない。重要なのは、それらがどのような状況、どのような関係性の中でとらえられているかということである。「他者の視点」や「ものの見方・考え方」が表現の生きた場面にあらわれるようにすることが重要であり、それは教師と生徒が書くことをとおして向き合っ

ている場である。

### 1. 単元づくりの動機 —中2「交流新聞」から—

総合の時間（開発研究の指定校である勤務校では、「国際コミュニケーション」の時間と呼ぶ）に、日本文化を外国人（留学生）に紹介する学習を行った。グループごとに日本文化を紹介する題材を決め、調べて英語で表現できるようにした。生徒が取り上げたのは、「茶道」「家庭料理」「肉じゃが」「着物」「陣羽織」「書道」「年賀状」などであった。この授業のあと、その時の様子を紹介するために「交流新聞」を書かせた。この新聞は、「テーマを選んだ理由」「選んだ題材の説明」「交流の様子」「交流の感想」という項目で構成するようになった。

できあがった新聞を見ると、交流の時の様子がいろいろと想像できて面白い。また、初めて出会った外国人に拙い英語で紹介することの苦労も伝わってくる。この苦労を、異文化コミュニケーション

# Japanese 陣羽織

Global

新聞

2B 3班

## 発表内容

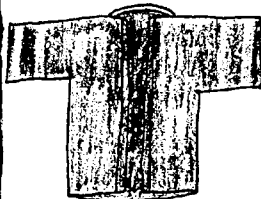
The warring state periods generals  
wore the Zinbaori.  
→戦国武将が陣羽織をきていました。  
They wore it on the armour.  
→よろいの上をきていました。  
It excels as protection against cold.  
→防寒としてかまえていました。  
Its sleeve larger than dress.  
→洋服より袖が広いです。  
Some zinbaori don't have sleeves.  
→袖がないものもあります。

## 質問されたこと

- ① Why did Japanese people stop wearing the zinbaori?  
→何故日本人は陣羽織をききあめたのですか。
- ② When do Japanese people wear the zinbaori?  
→日本人はいつ陣羽織をきるのですか。
- ③ Are zinbaori's factories existing now?  
→今 陣羽織の工場は存在していまるか。

## 伝えたかったこと

- 日本の服と外国の服との歴史の違い。
- 日本の服が時代ごとにならうこと。
- 日本はそれぞれの場面で着る服が違ってること。
- 男女の着る服のちがひ。



## 陣羽織

●日本  
日常会話  
かできる  
ようにこゝから  
らもちと襦袢り  
たり。  
今回は、いい  
経験になっ  
たと思う。



僕がハリハサルの時にうまくいっていたので  
成功すると思っていたけれど、本音で  
なると結構緊張したりしました。  
外国の人が皆論議の後に自分の国の  
話をしてくれたので、僕が外国と日本の  
文化の違いをわかってあげられた気が  
しました。それ以外、少し緊張しただけ  
とばかり思っていたのですが、先生は  
大丈夫は今回の失敗を改善したい  
です。

外国からの留日学生の方々に陣羽織  
について説明したり質問に答えるとき  
英語がわからなくてとてもおどろかした  
英語で

の難しさという面から見ていくと、次のような問題点が見えてくる。  
① 相手に対する理解不足

選んだ題材の多くはきわめて日本的なものである。しかし、このことは、日本に興味をいだいてやってきた留学生の側から見ると、必ずしも適切であったとは言えない。それは話題の新鮮みに欠けるからである。おそらく、彼らの多くは生徒の説明よりも詳しい内容をすでに知っていたはずである。相手は、何を知っていて何を知らないのか、何に興味があるのか、ということを生徒は事前に考えておく必要があった。

② 一般的な説明

英訳が難しいということを考慮したとしても、紹介されている内容はいずれも一般的で表面的である。本などで調べたことをただ英訳しただけで、取り上げた題材が自分のものになっていない。そのことは、交流新聞の中で次のように質問されて困った様子からも推測される。

Why did Japanese people stop wearing ZINBAORI ?

Are ZINBAORI's factories existing now ?

留学生の素朴で個性的な質問に困惑している様子が思い浮かぶ。

③ 題材と自分との関係の欠落

取り上げた題材と自分(紹介者)との関係が気になるのは、教師だけではない。留学生の場合も同じである。

How many New Year's cards do you write ?

Oh, really ? For one family or one person ?

なぜそんなにたくさん年賀状を書くのか、留学生は不思議に思う

だろう。しかし、生徒にはなぜそんなことを質問するのか、その理由が分からなかったようである。それは、自分との関係をぬきにして、年賀状とはこういうものだという説明で相手に理解してもらえらると思っっているからである。

## 2. 単元「私の中の日本を紹介する」(紹介文)の実践

「交流新聞」から見えてきた問題を、国語の時間で解決することをめざして次のような単元を作って実践した。

(1) 単元の構想

① ねらい

他者の視点で身近な生活をつつめなおし、自分とのかかわりの中で日本文化の一端を紹介する文章を書かせる。

② 単元編成

単元は、次の三つの教材で構成した。

《教材1》論説「玄関扉」渡辺武信(三省堂、中一)

《教材2》説明「手で食べる、はしで食べる」森枝卓士(学校図書、

小4)

《教材3》作文「私の中の日本を紹介する」(※自主教材)

「玄関扉」は、外開き・内開きという扉の構造の違いを、日本と欧米の生活習慣から比較することをおして、日本人の対人関係の特徴を述べようとした論説文である。扉の前で行う挨拶行動の「握手」と「おじぎ」は、欧米と日本人のそれぞれの対人関係を象徴的に示す行為として取り上げられている。「握手」が相手に近い距離

で交わされるのに対して、「おじぎ」は相手と少し距離を保って行われる行為であること。一方で、扉の開け方には、来訪者について客か外敵かの峻別が明確であるか曖昧であるかという姿勢も表れているという。

この教材には、日本と欧米の文化を「比較」すること、扉の構造の違いについて「一般的」に説明するだけでなく、生活や習慣に照らして「個人的な見方」をしようとしている点に特色がある。このような特徴を読み取らせ、その学習経験を書く活動に転用することとした。

(2) 書くための手だて

① 他者の視点

自分にとっては日常的でありふれたものでも、少し視点を変えて他者の目から見ると新たな発見がある。他者の視点に立たせるために、「日本に興味を持つている外国人」を読者として設定する。具体的には、自分が取り上げた日本文化について文献でいくらかの知識を既に持っているとして仮定した上で、彼らがこれ以外に何を知らたがっているのかを予想させることにした。

② ものの見方・考え方

日本文化の特徴を示すのに最も分かりやすい方法は、外国との比較(特に、対比)である。比較の方法としては、教材1「玄関扉」が参考になる。

「一般・個別」という見方についてもぜひ活用したい。自分らしさが表れる紹介文を書くには、一般的な説明だけでは不十分である。百科事典やガイドブックには簡潔で的確な説明が載っているが、そ

れを自分の生活にあてはめると、また違った特徴が見えてくるはずである。一般的に見ることと同時に、個別に見ることをとおして取り上げた題材と自分とのかかわりに気づかせたいと考えた。

③ 表現指導

日本と外国の文化の違いを比較しようとすれば、「観点」を明示すること、逆接の接続詞を使用することなどが予想される。また、事典類などの文献を活用するのであれば、引用、伝聞表現、補足説明などの表現を用いることが考えられる。

(3) 指導の実例 — 「上靴」の構想例 —

次に示すのは、「上靴」という題材で取り組んでいる生徒のものを例に取り上げて、学級で話し合った際のものである。

1. ① 題材 …… 上靴

② 要点 …… 靴を履き替えることから、日本人が几帳

面だということがわかる。でも、中には几帳面でない日本人もいる。

2. 材料

・ 日本では下履きと上履きがある。

・ 欧米の人は、靴を履き替えるのは面倒だと思っているらしい。

・ 上履きは、定期的に持ち帰って家で洗う。

・ 小学生の頃は、上履きを入れる靴袋を持っていた。

・ 中2になると、上履きを持ち帰らない人が増えた。(僕もそうだ。)

・ 女子に聞くと、月二回は洗うそうだ。

### 3. 内容の整理

#### (1) 一般的な説明

日本では、屋外で履いている靴は、すべて玄関ホールで脱ぐ習慣があります。ここで室内用スリッパに履き替えることもあります。靴は、下駄箱に片づけられています。(「ジュニア版イラスト日本まるごと事典」講談社)

#### (2) 個別の体験

##### 〈具体的に〉

日本人は几帳面 ↓ 靴を履き替える

〈全体的〉 履き替えるだけでなく、上靴を洗う。

← →  
(小学生) 毎週持ち帰って洗っていた。

〈例外〉 ← 〈変化〉

僕の場合 (中学生) 一度も持ち帰って洗わなくなった。

この生徒は、日本人の履き物の習慣を取り上げ、そこに日本人の几帳面さを見いだそうとしている。確かにこの生徒は、室内の外と内とで履き物を替える習慣の原因を誤つてとらえているが、外国人が上靴を履き替えるのは煩雑だと思つてという予想はあたっているかもしれない。また、調べた文献では履き替えの事実の指摘しか記述していないのに対して、自分の場合に照らして、履き替えるという習慣の背後にある日々の生活を伝えようとしている。そして、これらの内容を、「具体的に」「全体的・例外」「変化」という言葉を用

いて関係づけようとしていることが分かる。

#### (4) 授業の実際 — 「こたつ」の作文 —

次にあげる作文は「こたつ」を紹介したものであり、今回の実践の中で書かせたものの中では優れたものの一つである。

こたつ — 日本人と言えばこたつにみかん —

○ こたつって何？

「暖房器具の一つ。熱源となる炭等の上にやぐらを置いて、ふとんをかけ、下半身を入れてあたたまる。足を入れる部分が低くなっている掘りこたつと、座しきの上に置く置きこたつがある。」(『総合百科ポブラディア』ポブラ社)

こたつは、私たちにとってなじみの深いものである。冬になればこたつが出てくるのを今か今かと楽しみにすると思う。ではこのこたつ、いつ頃から使われるようになったのだろう。

日本でこたつが使われるようになったのは、室町時代からで、この頃は掘りこたつが主流であった。そして、江戸時代の中頃から置きこたつが登場し始めた。最近では電気こたつが主流になっている。日本で有名なこたつが、外国に行けば、冬になってもこのこたつを見ることができない。こたつの代わりに、暖炉がほとんどの家庭で使われている。

では、こたつと暖炉、一体どんなところが違うのだろうか。

〈暖炉〉 どこにいてもだいたいあたたかい。

- ・ 部屋全体をあたためる。
- ・ でも足が冷えやすいと思う。

へこたつ

- ・ こたつに入っている部分があたたかい。
- ・ 窓のそばだと背中が冷える。
- ・ 足はあたたかい。

○ 日本人のケチ魂

関西の名物といえば大阪のおばちゃんだ。大阪のおばちゃんといえば「ケチ」というイメージがある。関西に限らず、日本人のケチさは、いろんなところに残っている。

例えばアロハシャツ。アロハシャツは日本のケチ魂の産物だと思う。着物を着て向こうの南国に行った日本人。しかし当然ながら暑い。なので、その着物をシャツにして売ったらウケた……。アロハシャツの起源は日本人のケチ魂（もつたいない精神）だった。そんな日本人のもつたいない精神の結晶の一つがこたつだと思う。なぜなら、こたつは体をあたためる時に非常に効率よくはたらくからだ。

人間は足を温めれば血行が良くなって体全体が温かくなる。それに比べてみると、暖炉は、私的には近くに寄らないとあたたかくないと思うし、冷たい空気は下の方に行くのだから、こたつより足が冷えやすいと思う。

○ なぜ外国にこたつがない？

私的にはこんな便利なこたつなのに、なぜこたつは外国にないのだろう。私が考えた理由としては、

① 床の違い

外国はフローリングだから座ると冷たい。畳だとフローリングよりはましだ。とゆうか、土足の場に置けるわけがない。

② 大きさ

日本人のように部屋の中にかでかこたつを置かれても邪魔だろうし、なにより大柄な外国の人がこたつに入ってもぎゅうぎゅうづめになるだけだと思う。

③ 座ること

外国の人にとって座るといえば、ソファやイス。日本人のように床にじかに座ったりということは無いのだ。上の三つの理由（多分他にもまだある）から、外国人はこたつを使用しないのだと思う。でも一回日本にやってきてこたつに入ってみてほしいと思う。

○ 家族の輪、こたつ

こたつは家族が囲らんする場でもある。食事をしたり、TVを見たり……。そんなこんなから、私はこたつを見るとホッとする。特にこたつに入って昼寝するのはすごくうれしい。こたつは機能面に優れているだけでなく、こんなところにも一役かっている。

こたつはやっぱり日本の素晴らしい文化だと思う。

引用したガイドブックには暖房器具としての一般的な説明しかないのに対して、この生徒は「こたつが出てくるのを今か今かと楽しみにする」という個人的な強い思い入れを込めて説明しようとしている。確かに冗長的で遊び半分表現も見られるが、自分なりのこたつのイメージを大切にしようとしている。その結果、こたつには暖房器具としての働き以外に、「家族団らんの場合」としての役割があることを見つけている。

「比較」という説明の仕方もある効果的に用いられている。同じ暖房器具である暖炉を取り上げ、どのように暖かくするか、効率的か否かという観点で比較している。

また、一方で欧米では暖炉が使われる理由を、家屋の構造と生活の仕方から推測しようとしている。こたつの特徴を説明しながら、あわせて日本人の生活スタイルやものの見方・考え方を補足的に説明している。

### 3. 協議会での実践報告をかりかえって

協議会でさきのような実践報告をした際、いくつかの意見や質問をいただいたが、その中で最も考えさせられたのは次の二つである。

①「生徒はどういう他者を想定していたのか」

②「語彙指導はどのように行われたのか」

この二つの指摘を手がかりにして、もう一度自分の実践をとらえ直し、「いま、表現力をどう育てるか」という課題について「ことばの力を問い直す」という視点から振り返ってみたい。

(1) 生徒が想定した他者は誰だったのか

文章を書く際に他者意識が重要であることは言うまでもない。したがって「日本のことを少しは知っている外国人」を読み手として意識しながら書かせたことは正しかったはずである。しかし、できあがった作文を読み返してみると、想定した読み手向けの文章であるとはいいがたい。そのことは、「なぜ外国にこたつがない？」の段を読めば分かる。この段に書かれていることは、自分がいだいた素朴な疑問と推測である。この疑問は、間違いなく書き手の立場で書かれている。もしこれを想定した読み手の立場で取り上げるとすれば、次のような疑問になるはずである。

「なぜ日本には暖炉がないのか？」

欧米に住んでいる人は、「自分の生活の中になぜこたつがないのか」という疑問はふつういだかない。いざこの場合は、これから知りたいと思っている日本のことについて、自国にあるはずのもの（この場合は「暖炉」）がなぜ日本にはないのか、という疑問である。異文化について考える際の基準は、あくまでも自国の生活であり自国の価値観だからである。

では、この生徒は誰を他者として設定していたのだろうか。

推測ではないが、授業者つまり筆者自身ではなかつたかと思う。この生徒が「日本のことを少しは知っている外国人」像をイメージするのは、結局のところ授業者との会話をとおしてである。個別指導の中で、授業者は「相手の外国人は暖房器具と聞いて何をイメージする？」「こたつと暖炉の比較から何が分かる？」と問いかけた。生徒は、これに答えるという文脈の中で書いていた。授業者は、「日

本のことを少しは知っている外国人」役を代行したつもりだったが、実際には生徒は、授業者という読み手に応じようとしたにすぎなかったのだ。本来の対話すべき他者と向き合ってはいなかったのだ。

書き手が、真に対話すべき他者と向き合うためにはどうすればよいのだろうか。この問いに対する答えを一般化した形で述べるほど自分には力がない。この生徒の場合にかぎって言えば、「なぜ外国にこたつがない？」の部分の話題にした上で、「ワタシハ・コンナ・ギモンヲ・モチマセン。コノギモンヲ・ワタシノ・タチバデ・ツクリカエテクダサイ。」と言うことがその答えになったかもしれない。

## (2) 認識力と文章表現指導の關係

「語彙指導はどのように行われたのか」という指摘は、別な言い方をすれば、「語彙や文章表現の指導が不足していたのではないか」「語彙や表現レベルで変容したのか」という批判であると受け止めている。指摘のとおり作文を見ると、語彙や文章表現上の問題点が散見される。たとえば、「なので」「私的には」などの話し言葉、「日本人のケチ魂」に見られる冗長的な表現、などである。その中でも最も大きな問題は、せっかく個別な見方で認識されたものが適切な語彙や表現に置き換えられていないことである。

作文の中に「家族の輪、こたつ」という段がある。こたつには暖房器具としての役割以外に「家族団らん」という機能があることを指摘した部分であり、この作文の中で最も個性的な記述が期待できる箇所である。しかし、せっかくの優れた発見も表現の上では成功していない。読者は「家族団らん」の様子が具体的に描かれるのを期待して読むはずだが、実際には、「食事をしたり、TVを見たり

……。そんなこんなから、私はこたつを見るとホッとする」とあるだけで、ここには「家族」が登場しない。「一緒に食事する」「一緒にTVを見て笑う」「時々こたつの中で足と足がぶつかる」「TVを見ながら急に学校の話を聞いてくる」といった「家族」が書かれていないのである。

優れた認識をいかすには適切な語彙と効果的な表現が不可欠である。語彙や表現を探すことは、またさらに認識を深めることにもつながる。本実践にはそのような指導が十分でなかった点は否定できない。では、どのようにすればよかったのか。

一つは、ことばへのこだわりである。引用したガイドブックの中に「下半身を入れてあたままる」という記述がある。ガイドブックの「下半身」ということばに対して、生徒は「足」ということばを使っている。「下半身」と「足」ということばは、それぞれどのような意味で、どのように違うのか。また、ここではどちらのことばを使うべきか、ということを考えさせるべきであった。

もう一つは、「類語辞典」の活用である。「団らん」ということばのイメージを豊かにすることが、さきの認識と表現の問題を解決するはずである。「類語辞典」を用いて「団らん」を引けば、「寄り合い／集まり／集い」などのことばが見つかる。これらのことばからイメージを広げていけば、「団らん」ということばで言い表そうとしていた考えはより具体的な形をとまって想像を広げていったであろう。

## (3) 「ことば」をばさんで生徒と教師が向き合う

協議会での二つの指摘から、自分なりに「ことばの力」をとらえ



なおすと、それは単純にことばそのものだけが問題なのではなく、ことばが置かれている状況のほうが大きいことに気づかされる。さきのふりかえりでも見たように、生徒が書いたものの中には、よりよい作文になるための手がかりになることばがたくさんあった。しかし、それらのことばに気づき、いかせなかったのは、そのことばが適切な位置に置かれていなかったからである。

授業者は、ことばを適切に位置づける努力を忘れ、「他者」「個別の見方」に惑わされてしまった。「他者」ということばを安易に用いて、あたかも生徒が目の前にいない読み手をイメージ豊かに思い描きながら文章を書くようにしむけたが、生徒は結局目の前の教師を意識したにすぎなかった。また、「個別の見方」についても、生徒がまったく独力で見つけたというよりも教師との会話の中で偶然見つけたといった方が近い。一般的なイメージから始まって、どんどん話からそれていくのを教師が相槌をうちながら聞いていく内に偶然出てきたことばである。

「他者」にしても「個別の見方」にしても、授業という場面の中でとらえれば、それは教師と生徒が向き合った中でうまれてきたことばである。両者が共鳴し合う場ではが発見される、そのことばこそ、生徒の表現を決定づけ、書くという行為を促す原動力である。自分の実践をふりかえって、きわめて平凡ではあるが、教師と生徒が向き合う場で生まれてくることばを一つ一つ紡ぎ出していく営みが表現力を育てることにつながるのだという思いを強くした。

(広島大学附属三原中学校)